

PRAEVIDENTIA DAILY (11月15日)

昨日までの世界：次期議長のハト派発言にも拘らず 100 円乗せ

昨日は、米債券・株式市場は Yellen 次期 FRB 議長の指名承認公聴会での発言をハト派と捉えた一方、米金利の低下が他国より小幅に留まったことから、為替市場では対主要通貨で対ポンドを除き全般的にドルが小幅上昇した。ドル/円は結局、東京時間早朝に Yellen 次期 FRB 議長の発言原稿が流れた後の 99.11 円が安値となり、ハト派的な発言は概ね出尽くしとの見方からか、アジア時間、欧州時間にドル買いが先行し 100 円乗せとなり、高値は 100.15 円となった。公聴会後は Yellen 氏発言で大きく上下したというほどでもなく、概ね 100 円丁度を挟んだもみ合いの展開となっている。Yellen 氏は、資産購入プログラムが永遠に続くことはないとしつつも、短期金利がゼロに達し景気腰折れの際の利用可能な手段が限られている状況では金融緩和による景気支援をやめるべきではないと述べ、目先の資産購入縮小開始の可能性を示唆しないハト派的なものとなった。

ユーロを巡っては、注目されたユーロ圏 3Q GDP では、ユーロ圏主要国の中ではフランス分が市場予想のゼロ%に対し前期比-0.1%と市場予想を下回ったほかは市場予想通りで、ユーロ圏分も市場予想通り+0.1%とサプライズのない結果となったが、発表後ユーロは軟調となった。その後 Yellen 氏の公聴会発言に向けたドル売りからユーロ/ドルは反発したが、前日高値および ECB 利下げ前の水準である 1.35 ドル台は回復しなかった。この間、ポンドは英中長期債利回りの低下にも拘らず BoE インフレ報告発表後の上昇基調が続き、対ドルで 1.61 ドル丁度手前まで上昇している。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

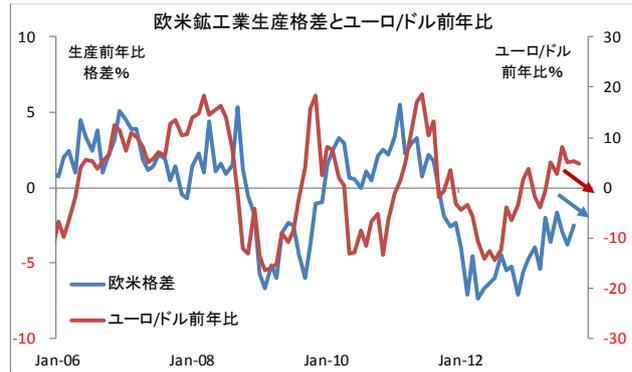
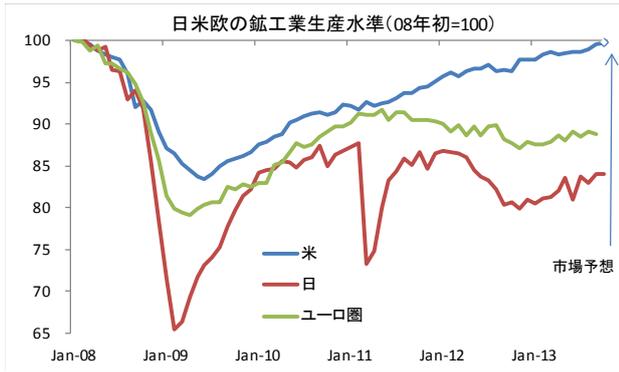
	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	+0.7	-0.01	-0.01	+0.00	-0.01	-0.01	+0.00	+0.5	+2.1	+0.1	+1.2
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	-0.2	+0.01	+0.00	-0.01	-0.02	-0.03	-0.01	+0.9	+0.5	+1.2	-0.01
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.1	-0.02	-0.02	-0.01	-0.04	-0.05	-0.01	+0.5	+0.5		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	-0.5	-0.03	-0.04	-0.01	-0.06	-0.07	-0.01	+0.5	+0.6	+0.1	
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	-0.2	+0.00	-0.00	-0.01	+0.01	-0.00	-0.01	+0.5	+0.6	+0.1	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	+0.1	-0.01	-0.01	-0.00	+0.02	-0.01	-0.03	+0.5	+0.1	+0.1	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：欧米鋳工業生産格差は 1.30 ドル割れを示唆

本日は相場材料が少なく、①Mersch・ECB 理事発言 (21:15、中立)、②米 11 月 NY 連銀製造業景況指数 (22:30、前月 1.52、市場予想 5.00)、③米 10 月鋳工業生産 (23:15、前月+0.6%、市場予想+0.2%、前月比)、などしかない。ドル/円は Yellen 氏のハト派発言にも拘らず底堅さを増しており、目先資産購入縮小開始がなかったとしても市場は米経済指標の結果次第ではドル買いを進め、103 円程度まで続伸する可能性が高まっている。

米経済指標では通常、NY 連銀サーベイへの注目度が高いが、一地区連銀のサーベイでしかなく、またシカゴ、フィラデルフィア分と比べて米国全体 (ISM) との連動性が高いというわけではないことから、相場は動くかもしれないがドルの方向性を左右する重要指標とは言い難い。他方、鋳工業生産は、経済のサービス化が進化した今日にあっても、一国の GDP 全体 (の振れ) との連動性の高さから、依然として重要度が高い。特に、2006 年以降で見ると、ユーロ/ドル相場 (前年比) と欧米鋳工業生産の前年比格差との動きは連動性が非常に高い (下図を参照)。足許については、米鋳工業生産の前年比プラス幅は拡大傾向にあり、今回 10 月分も前月比こそ+0.2%と微増だが前年比では前月の+3.2%から+3.5%へ加速する見込みとなっている。ユーロ圏 10 月分は 12 月 12 日発表予定でまだ発表されていないが、米国の優位が再拡大しつつあり、ユーロ/ドルの下落を示唆している。因みに、ユーロ/ドルの 1 年前の水準は 1.30 ドル程度であったことから、ユーロ/ドル前年比がマイナスに転じるには 1.30 ドル割れが必要となる。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。

ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。